9 自分の仕事と他人の仕事

ところで、企業にはいろいろな部門があり、多くの人が働いています。製品を開発する部門もあればそれを製造する部門、あるいは販売する部門もあります。さらに人事とか経理といったいわゆる間接部門もあります。そういういろいろな部門の一人ひとりの働きが総合されて、企業全体としての成果となってあらわれてくるわけです。そして、そのような総合された成果が社会にとって役立つものであってこそ、はじめて事業が成り立ち、私たちも毎月の給料を手にすることができるわけです。

ですからそのためには、それぞれの部門の、さらには一人ひとりの働きというものが、それにふさわしいものでなくてはなりません。かりに私たちが技術部門で働いているとして、熱心に研究し、他にないいい製品を開発したとしても、製造部門にミスが出て不良品が続出したなら、私たちのせっかくの努力も実らなくなってしまいます。あるいは私たちが製造部門にいて、心を込めて立派な製品をつくったとしても、販売政策が当を得なくて、それが売れなかったということもあるかもしれません。

そのように、私たちがどんなに一所懸命いい仕事をしても、他の人がやるべきことを怠ったり、私たちの働きを殺してしまうような仕事のしかたをしたとすれば、私たちの働きも生きず、したがってまた企業全体としての成果もあがらない、それで本来得られるはずの給料も得られなくなってしまうといったことも考えられます。もちろんその反対に、他の人が誠実に自分の仕事を遂行しているのに、私たちがそれに反するようなことをすれば、やはり全体として世間に受け入れられるようないい仕事はできないということにもなってしまいます。

企業といわず、組織体においては、そのように一人ひとりの仕事が密接につながり合い、補い合っています。だからこそ、一人ひとりがそれを怠りなくやっていくことが大切で、そうしてはじめて消費者にかぎらず世の人びとの生活も向上し、私たちもまた給料を得て暮らしていくことができるのです。

10 税金は何のためにある？

このように、今日の社会では、企業がいろいろな物資の生産を分業して行い、そしてそれを売買することでお互いの生活に必要なものを供給しあっています。いい換えれば、数多くの企業があたかも一つの組織の一部であるかのように助け合い、支え合ってこの社会は成り立っているわけです。

しかし社会のような大きな組織ともなると、どうしてもそれにふさわしい調整役が必要となってきます。そうしないと、社会全体が混乱し、うまく機能しなくなるからです。この社会の調整役、それがいわゆる政治とか行政であり、それにたずさわる公務員の人びとなのです。

つまり、かりに10人なら10人の人がそれぞれ個々にいろいろな物資の生産にたずさわっているという場合、そこにそれぞれの仕事の調整役というか、全体の運営がバランスよく円滑にいくようにしていく世話役というようなものが必要になってきます。そこで10人の中から1人を選んで、その人にはもうものをつくる仕事はやめて、全体の世話役の仕事をしてもらう、そのかわりにその人の生活は残りの9人でその収入の一部を出し合って負担していこうというふうになる。つまり、それが政治、行政であり、公務員なのではないでしょうか。

もちろん、実際にはどのような過程をへてそうなったのかはわかりませんが、一応の考え方としてはそういうものが政治なり行政という仕事の起こりだと考えられます。

そのように各人が自分の収入の一部をさいてでも、そうした世話役を置くことによって、一人ひとりが自分の仕事に専念でき、またみんなの働きがよく調和して、個々にも、全体としても生産性があがり、より大きな成果が得られるというわけです。そういう調整の役割を十分に果たすことにより社会を高めていく、そしてその報酬として、みなが収入の一部をさいてその人にくれる。政治や行政にたずさわる人びとの仕事、そして俸給なり歳費というのは、本質的にはそのような意味をもつものであり、したがって、その仕事が人びとに役立つから存在するということについては、他の仕事と同じ性格をもつものなのです。

しかしながら、そうした全体の調整役の仕事は、その本質においては他の仕事と共通の意味をもつものであっても、それが他の人びとに及ぼす影響という点においては一段と大きなものがあると考えられます。そのやり方が当を得れば、他の人びとの仕事もスムーズに運び成果があがるでしょうが、やり方がまずいと、かえって他の人びとの仕事の妨げになったり、全体の調和を乱したりして、生産性を落とすことになってしまいます。そういうことでは、わざわざみなの収入の一部をさいてそうした世話役を選んだ意味がなくなってしまい、「もう君はやめてくれ」ということにもなりかねません。

今日では政治や行政の機構が大きく複雑になり、それに要する費用は各人が自主的に自分の収入の一部をさいて出すというのでなく、法律で定められた税金というかたちで納めるようになっています。そういうこともあるうえに、日本ではまだ封建時代の名残とでもいうか、何か政治とか行政というと、いわゆる“お上”がやるものだというように、国民もまたその衝にあたる人びとも無意識的に考えるような風潮があります。

そういうところから、税金というものは必要なだけとればいいといった考え方もあるようですが、決してそうではありません。いずれにしろ、政治なり行政の仕事の本質というものはここに述べたようなものであることを、私たちはよく認識しておく必要があるのです。

「働くとは」～先人に学ぶ～ 5 約束を厳守する

『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』の著作で知られる、ロシアの文豪トルストイの旅先でのエピソードです。

とある道端で出会った女の子が、どうしてもトルストイの持っている鞄（かばん）が欲しいと母親にせがみました。ゆりの花の刺繍（ししゅう）がしてある布製のかわいい鞄です。母親にたしなめられている女の子を見かねたトルストイは、「明日になったらこの鞄はいらなくなるから、明日この鞄をあげようね」と女の子に言いました。

翌日、約束通り鞄をプレゼントしようと、トルストイが女の子の家を訪ねてみると、何とその女の子は、急な病気で亡くなっており、葬儀もちょうど終わったところでした。驚いたトルストイは、母親に頼んでお墓まで案内してもらい、墓前で祈りをあげた後、そっとその鞄を捧（ささ）げました。それを見ていた母親が「もう娘は亡くなっています。どうぞ鞄はお持ちください」と言うと、トルストイは次のように答えました。

「お子さんは亡くなられたかもしれませんが、約束した私の心はまだ生きております。どうかお受け取りください」

たとえ、すでに亡くなっている小さな女の子との口約束であろうと、それを何としても守ろうとするトルストイ。

心に残るお話です。

私たちが暮らすこの社会は、一面において、人と人との約束があってはじめて成り立つものといえるでしょう。たとえば、お金にしても、これこれの価値があるとお互いに認めあおうという約束があればこそ、安心して使うことができます。それが守られなければ、誰（だれ）もお金と商品を交換しなくなるにちがいありません。あるいは交差点の信号も、赤では停止という約束を守りあってこそ、お互いの安全が確保されます。みんなが信号を無視するようなことにでもなれば、たちどころに道路は渋滞、事故が起こるでしょう。また国の法律が守られないとなると、社会の風紀は乱れ、治安は悪化して、おちおち外を出歩くこともできなくなるでしょう。このように、約束は、すべてお互いの生活を円滑に送る上できわめて大事なものであり、それなくして社会は成り立たないのです。

それだけに私たちは、どんなに些細（ささい）な口約束であろうとも、いったん約束したからには、何としても守るよう努めなければならないといえるでしょう。自分に都合が悪くなったからといって、平気で約束を破るというのでは、誰からも信頼されなくなってしまうのはもとより、他にたいへんな迷惑をかけることにもなりかねません。

お互いに、一度した約束は厳守し、信頼を高めあうべく努めていきたいものです。

（PHP総合研究所 研究本部：編著『なぜ働くのか』PHP研究所）